

小中学校における英語絵本の読み聞かせの方法とその効果について

池上 真由美

Effective Use of English Picture Books in Elementary and Junior High School

Mayumi IKEGAMI

Abstract

The purpose of this study is to suggest some effective methods of storytelling at school. Students in the 3rd grade, 6th grade, and 8th grade of 3 schools participated in this practical research. Eight English picture books were read aloud as morning studies (15min) in two different ways; using an original picture book, and using a screen to show enlarged pages. A life projector was used to show large images at first, then PowerPoint slides were adopted to ensure the brightness and clarity of the images. The use of ICT equipment helped students look at pages clearly from anywhere in a classroom. The results showed that junior high school students preferred PowerPoint slides since they were able to look at words as well as pictures. Using slides promoted the effectiveness of storytelling for them. The storyteller could move around and use his/her hands freely to make various gestures. It allowed the students to have a better understanding of the story from the storyteller's gestures and facial expressions. It was obvious that storytelling is a very effective way to enjoy learning English, therefore, more chances for storytelling should be given to students at school.

Key words : English Picture Books, Storytelling, PowerPoint, Visual Information

キーワード : 英語絵本, 読み聞かせ, パワーポイント, 視覚情報

1. 背景

2022年, 新高等学校学習指導要領の実施が始まり小中高すべての校種で新しい外国語教育が導入されることとなった。小学校においては改訂3年目, 中学校においては2年目を迎えるが, これまでにない大きな変

化を経験している教育現場では, 様々な困難が生じている。まず, 小中学校において, 必要な教員育成が追いついておらず深刻な指導者不足の状況に陥っている。語彙数が大幅に増加したため指導時間が足りず未消化のまま次の単元に進む傾向があり, 学力の二極化が進み, 小学校においてすでに英語嫌いになり, 学習

意欲が低下している児童が見られる。書くことが小学校に導入されたものの、十分音声に親しむ前に、教員が書くことを求めてしまう、また、小学校における歌やチャンツなどの指導方法が中学校で十分に生かされていない。以上のような人的資源の問題や教員の指導上の課題に関する様々な声が現場から聞こえてくる。

これらは、新学習指導要領導入時の課題であり、次第に解決することも考えられるが、少しでもこの移行をスムーズに行い、小中高の接続を滑らかにする必要があると考える。そこで、今回の学習指導要領の改訂の目玉である外国語科のキーワードに注目したい。「目的・場面・状況」を意識した言語活動という表現が何度も登場し、その重要性が強調されている。しかし、実際の授業において、この3つに十分に配慮した単元計画を立てることは学期に2回程度が限度であり、教科書の内容だけを消化する授業に流れやすい。

そこで、「目的・場面・状況」がはっきりしており、多様な表現に触れることができる絵本の活用を提案したい。絵本は文脈が明確であるため、場面や状況を説明する必要がなく、絵や文から推測しながら読み進めることができる。小学校では、読み聞かせを中心に、中学校では、読み聞かせから自立読みにつなげる活動を中心に絵本を活用することで、大量の単語や表現に無理なく、楽しみながら触れさせることが可能になる。

筆者が、ある読みきかせボランティア団体の会議に参加したときのことである。ここでは、読み聞かせに使った本を、後で児童が手に取ってみることができるようなコーナーを図書室に設置したらどうかという提案がなされた。読み聞かせでは、読み手の声と絵本の絵を中心に進めるが、絵本の絵を楽しみに聞く児童が多い。児童は読み手を囲むように座るが角度によっては見えにくい場所ができる。児童が見やすいように提示することが重要であるというのが提案の趣旨であった。

英語の絵本となると、見やすい提示方法はさらに重

要になると考える。英語の絵本には、児童の知らない単語が多く出てくる。児童は、音声と絵を手掛かりにお話の内容を推測し、ストーリーや英語の音・リズムなどを楽しむ様子がうかがえる。図書館などでは、絵がよく見える大型絵本を活用して読み聞かせをしているが、高価であるため、多くの大型絵本を揃えることは難しい。

そこで、小学校の普通教室に設置された実物投影機を使い、絵本のページを大きく映して読み聞かせを行ったところ、視覚を通しての情報が得やすくなり、最後まで集中して聞く児童が増える傾向が見られた。

本研究では、小学校の文化である絵本の読み聞かせを中学校にも取り入れ、豊かな言語体験につなげる方法を提案したい。そのために、小学校・中学校のそれぞれの発達段階に適した絵本の提示方法、選書の観点、読み聞かせの留意点に重点をおいて研究を進めていく。

2. 先行研究

新学習指導要領のもとに作成された小学校中学年用補助教材、『Let's try! 1』では、最終章に“In the Autumn Forest”という絵本の教材が導入されている。また、高学年用の『We Can! 2』にも、“Story Time”として、続きものの物語が各章に掲載されている。その後、新しく編纂された教科書の中でも絵本が積極的に取り入れられ、絵本を活用する活動が今大変注目されるようになってきた。アレン玉井(2010)は、絵本は場面設定がはっきりしており、意味のある文脈の中で大量の英語をインプットすることを可能にし、絵を手掛かりとして、日本語を介さずに意味を推測しながら聞き続ける力を育てることができる大変有効な指導方法だと述べている。

英語絵本の活用に関する研究は、小学校における読み聞かせについて行ったものが多く、主に次の3つの分野に分けられる。①絵本の選定方法について、②読

み聞かせの手法について、③読み聞かせの環境作りについて、である。①②の分野においては、様々な報告がなされているが、③の分野の研究は最も少ない。

①の絵本の選定について、エリスとブルースター(2008)は、教材用として書き替えられていない「本物の絵本」(authentic storybooks)は、現実のコミュニケーションを反映しており、読書意欲を向上させると考え、その活用を推進するために、絵本をジャンル別、トピック別、英語のレベル別に分類したチャートを作成した。さらに、言語教育の目的を言語的・心理的・認知的・社会的・文化的という5つに分け、目的に応じた選定基準表を作成し、絵本を核とした教科横断的学習や発展学習につなげるコースデザイン例を提案している。

松浦・伊東(2012)は、児童に対して、リズム、繰り返し、ストーリーの簡潔さ、絵と言葉の適合の4点を基準に選んだ11冊の絵本を読み聞かせ、理解力、興味・関心、聞こうとする態度・意欲について小テストとアンケートを3回実施した。その結果、それぞれの項目について回を重ねるにつれて向上が見られたと報告している。また、児童がよいと感じる絵本の特徴として、「心地よいリズムがある」、「場面設定が何度も繰り返される」「ストーリーが簡潔で予測しやすい」という3点をあげている。さらに、児童が選んだ上位3作は、いずれも教材用として作られたものでなかったことから、児童は海外で刊行された「本物の絵本」をより好むと結論づけている。

②の読み聞かせの手法について、萬谷(2009)は、3人の教師の読み聞かせにおける発話を分析し、教師の英語による問いかけが有効であることを検証している。また、大川(2014)は、低・中・高学年の児童への読み聞かせの手法について研究し、低学年では身体表現を、中学年ではグループ活動を取り入れることが有効であることを検証した。

吉村(2017)らは、小学校2校の5年生児童を対象に、半年間読み聞かせを続けた後、アンケート調査を

行い、事前事後の変容を調べた。その結果、外国語に対する興味や英語絵本への興味をもつ児童の割合が増えたことを報告している。また、結果の分析から、あらすじや話の展開を類推させるための手法7点と参加型の雰囲気作りのための手法3点、さらに、環境作りの留意点として、天候や絵本の材質による見えにくさを防ぐための遮光用カーテンの使用を推奨し、後ろや端に座る児童にもよく見えるように、実物投影機、スライドショー、ブックスタンドなどの活用についても言及している。

③の環境作りに関する研究について、田縁(2010)は、電子黒板を使ってその効果の検証を試みているが、行動観察による見取りによる方法をとっており、量的な分析はなされていない。

以上より、読み聞かせの環境作りの重要性が指摘される一方で、環境に関する要因についての量的研究が十分されていないことが課題として残っている。そこで、本研究は、全員の児童生徒にとって見やすく、楽しめる読み聞かせの環境作りに焦点をあて、その要因を明らかにしていきたい。また、絵本の選書と読み聞かせの留意点についても、先行研究の結果と比較検討し、より効果的な方法を考察したい。

3. 研究目的と仮説

本研究では、大型スクリーンを使用して英語絵本の読み聞かせをすることは児童生徒の聞く意欲を持続させることに効果があるという仮説の元、絵や文字を拡大して提示することの効用について検証を試みる。また、小中の異学年の児童生徒を対象として読み聞かせを行い、発達段階による効果の違いを検証し、それぞれの学年に適した読み聞かせの留意点、選書の観点についても明らかにする。

4. 研究方法

(1) 絵本の提示方法

小学校の中学年（3年生）・高学年（6年生）及び中学校（2年生）において、2つの方法で絵本の読み聞かせを行い、アンケートの結果を比較する。1つは、従来通りの方法で、絵本の実物を使って読み聞かせを行う。他方は、実物投影機あるいはパワーポイントを使用して大型スクリーンに投影して読み聞かせを行う（表1）。小学校では、読み手の周りに児童が集まり、椅子を使わずに聞く形態に統一し、中学校では、各自の机にすわったまま聞くという体制で実施した。より多くのデータを収集するために、小学校では2校の児童を対象に、中学校でも2校を予定していたが、コロナ禍のため、1校のみの実施となった。

読み聞かせは、朝学習（15分間）で行い、絵本7～8分、アンケート5分というように時間配分をした。また、読み方に差が出ないように同一の読み手が行い、絵本を読む前後のやり取りなども統一し、学年により実施方法に差異が出ないようにした。その際、児童生徒の反応や発話を観察・記録し、効果的な読み聞かせの手法、選書の観点、環境づくりにおける留意点を検討するようにした。

表1 読み聞かせ方法の違い

条件	スクリーンの使用	
	6年生	3年生
絵本1	有	無
絵本2	無	有
絵本3	有	無
絵本4	無	有
絵本5	有	無
絵本6	無	有
絵本7	有	無
絵本8	無	有

毎回の読み聞かせの後、表2の5項目について4件

法でアンケートをとり、比較分析を行った。また、全16回の読み聞かせ終了後、最終アンケート（表3）をとり、読み聞かせの留意点について検討した。

表2 事後アンケートの質問項目

- | |
|-------------------------|
| ① 今日の読み聞かせは、楽しかったですか？ |
| ② 絵本の内容は、わかりましたか？ |
| ③ 今日の読み聞かせは、聞きやすかったですか？ |
| ④ 絵本の絵は、見やすかったですか？ |
| ⑤ これからも英語のお話を聞きたいですか？ |

(2) 絵本の選書

絵本は、絵がはっきりとしていて見やすいもの、歌やチャンツ、クイズを入れて児童生徒が参加しやすいもの、生活体験が似ており、メッセージ性があるものなどを中心に8冊選んだ（表17, 18）。中学校では、メッセージ性の高いもの2冊に変えたが6冊は共通している。最終アンケートにおいて、印象の残った絵本3冊について尋ね、児童生徒の好む絵本の傾向を分析した。

表3 最終アンケートの内容

- | |
|---|
| (1) 絵本のページを直接見るのと、スクリーンで見るのと、どちらがわかりやすいですか？ |
| (2) 絵本のページを直接見るのと、スクリーンで見るのと、どちらが好きですか？ |
| (3) 読み聞かせのとき、大切だ（見えたらいい、あったらいい）と思うものは何ですか？ |
| (4) 次の8冊の絵本の中から、心に残っている本を3冊選んで○をつけてください。 |
| (5) 8回の読み聞かせについての感想・意見・要望などを自由に書いてください。 |
| (6) 英語の絵本コーナーの本を読みましたか？
() 冊 【中学校のみ】 |

5. 結果と考察

(1) 絵本の提示方法

1) 小学校における実証実験1

岡山県総社市のA小学校において、2019年9～12月に3年生、6年生に対して読み聞かせを行った事後

アンケート結果は表4, 表5の通りである。

表4 A小3年生 事後アンケート結果 N=16

3年	実物投影機有り					実物投影機無し				
	項目	2回	4	6	8	平均	1回	3	5	7
①	3.80	3.69	3.75	3.88	3.78	4.00	3.80	3.69	3.50	3.75
②	3.67	3.38	3.56	3.69	3.57	3.50	3.87	3.56	3.63	3.64
③	3.93	3.56	3.69	3.94	3.78	3.63	3.73	3.75	3.56	3.67
④	3.87	3.69	3.69	3.63	3.72	3.81	3.67	3.50	3.69	3.67
⑤	3.80	3.81	3.63	3.88	3.78	3.88	3.73	3.63	3.75	3.75

表5 A小6年生 事後アンケート結果 N=23

6年	実物投影機有り					実物投影機無し				
	項目	1回	3	5	7	平均	2回	4	6	8
①	3.73	3.62	3.73	3.67	3.69	3.78	3.59	3.42	3.41	3.55
②	3.36	3.62	3.68	3.52	3.55	3.43	3.64	3.36	3.18	3.40
③	3.91	3.71	3.64	3.62	3.72	3.78	3.77	3.77	3.64	3.74
④	3.86	3.81	3.55	3.76	3.75	3.70	3.41	3.59	3.64	3.58
⑤	3.50	3.52	3.64	3.33	3.50	3.61	3.50	3.41	3.32	3.46

表4・5が示すように、1回毎にとった事後アンケートでは、各項目の数値のほとんどは、両学年とも3.5以上と非常に高く、スクリーン使用の有無にかかわらず、楽しさ、わかりやすさ、聞きやすさ、見やすさの項目において高い満足感が得られたと言える。また、項目⑤の数値からも次の読み聞かせへの期待感も同程度だった。実物投影機を使った読み聞かせは、実物絵本と同程度の満足が得られたことがうかがえる。それぞれの学年の平均値の差についてマン・ホイットニーのU検定を行ったところ、いずれの回のどの項目においても、平均値は3以上で高いことから、有意な差は認められなかった。

一方、16回全てを終えた後の最終アンケート結果(表6・表7)には、学年により大きな差が見られた。最終アンケート項目(1)(2)は4件法で、(3)は複数回答、(5)は自由記述で行った。また、(1)(2)については、理由を書く欄を設けた。

表6 A小 最終アンケートの比較(わかりやすさ)
3年生: N=16 6年生: N=23 単位%

わかりやすさの比較	3年	6年
①絵本	6	50
②スクリーン	56	36
③どちらもわかりやすい	38	14
④どちらもわかりにくい	0	0

表7 A小 最終アンケートの比較(好きさ)

好きさの比較	3年	6年
①絵本	19	55
②スクリーン	50	27
③どちらも好き	25	18
④どちらも好きでない	6	0

「どちらがわかりやすいですか?」という質問(1)に対して3年生では、56%の児童がスクリーンと答えているのに対して、6年生の児童の50%は直接見る方がわかりやすいと答えている。(表6)また、「どちらが好きですか?」という質問(2)においても、同じ傾向が見られた。その理由を調べると、3年生児童の多くが、スクリーンは、「大きく見える」、「見やすい」と回答しており、6年生の児童は、「色が薄い」、「絵が暗く見える」というデメリットを挙げていた。6年生の中には、直接絵本を見る利点を、「生で見ている感じで本の中に入っていける」「今どこの場面だなと思える」等の言葉で表現した児童もいた。これは、絵本のページをめくることで絵本の世界に入りやすい、臨場感を得やすいというメリットがあることを示唆していると考えられる。

次に、最終アンケート、質問(3)において、読み聞かせのとき、大切だ(見えたらいい、あったらいい)と思うものについての結果を図1に示す。

3年生は、歌やチャンツ、ジェスチャー、絵の見やすさ、声の聞きやすさなどの聴覚情報や視覚情報をより重視しており、6年生は、絵の見やすさや声の聞きやすさに加えて、読み手の表情や事前のやり取りと

いった項目を選んでおり、内容についての見通しをもつことを重視している傾向が見られた。

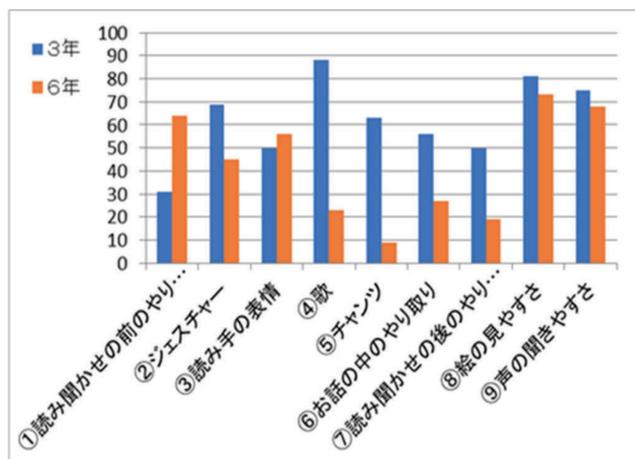


図1 A小 読み聞かせで大切なもの (単位%)

また、読み聞かせ中の児童の行動観察から、3年生は、視点を移動させることが少なく、スクリーンに集中しており読み手の表情やジェスチャーに目を向けることが少なかった。反対に、6年生は、スクリーンと読み手を交互に見ることができ、視点を自由に移動させながら聞いていた。6年生は、絵本のページだけでなく、読み手の表情も手掛かりとして活用して内容を理解したり、ストーリーを推測したりしていることが予想される。

このA小学校での実証実験により、3年生の児童にとっては、視覚情報は大きなリソースであり、実物投影機で大きく映すことは有効であることがうかがえた。また、6年生については、スクリーンの画質が確保できなかったため、結果に影響を与えたことも考えられ、この点はさらに検証が求められる。

2) 中学校における実証実験

総社市のB中学校において、2020年4～7月、2年生を対象にA小学校と同様の実証実験を行った。今回は、実物投影機を使用せず、絵本のデータを取り込み、パワーポイントでスクリーンに投影する方法をとった。これにより、より明るく鮮明な画像を提供することが可能になった。

中学校では、自力で文章を読むことが求められる。そこで、事後アンケートに、読書意欲、自立読みとの関連を調べるために、調査項目⑥「今までに、自分で英語の絵本を読んだことがありますか?」、⑦「自分で英語の絵本を読みたいですか?」を加えた。その結果は表8の通りである。

表8 B中2年生 事後アンケート結果 N=16

中学2年 アンケート項目	スクリーン有り				スクリーン無し					
	1回	3	5	7	平均	2回	4	6	8	平均
①楽しかった	3.40	3.60	3.50	3.40	3.48	3.50	3.44	3.40	3.44	3.44
②わかった	3.67	3.87	3.38	3.60	3.63	3.69	3.63	3.00	3.38	3.42
③聞きやすかった	3.73	3.93	3.75	3.80	3.80	3.75	3.75	3.60	3.63	3.68
④見やすかった	3.73	3.87	3.75	3.73	3.77	3.40	3.31	3.13	3.44	3.32
⑤これからも聞きたい	3.13	3.27	3.13	3.07	3.15	3.44	3.19	3.20	3.06	3.22
⑥自分で英語の絵本を読んだ	1.87	1.60	1.56	1.64	1.67	1.60	1.38	1.33	1.69	1.50
⑦自分で読みたい	2.40	2.60	2.69	2.64	2.58	2.75	2.38	2.60	3.00	2.68

**p<.01

B中学校でも、スクリーンの有無にかかわらず、①～③及び⑤の項目では、同程度の満足度が得られた。項目④の見やすさについては、A小学校の結果と違い、U検定の結果、有意水準1%でスクリーンの方が見やすいという結果となった。

中学生の最終アンケート結果は、次の通りである。

表9 B中 事後アンケート結果 (わかりやすさ) N=16 単位%

わかりやすさの比較	中2
①絵本	0
②スクリーン	80
③どちらもわかりやすい	20
④どちらもわかりにくい	0

表10 B中 事後アンケート結果 (好ましさ)

好ましさの比較	中2
①絵本	13
②スクリーン	54
③どちらも好き	33
④どちらも好きでない	0

中学2年生は、わかりやすさでは、80%の生徒がスクリーンを選んでいる。また、好ましさにおいて54%の生徒がスクリーンを選んでおり、大きく映すメリットをより強く感じていることがうかがえる。中学校では、パワーポイントで絵本を提示したため、より鮮明な視覚情報を得ることができたため、高い数値になったと考える。

また、図2より、読み聞かせで中学生が重視している項目は、声の聞きやすさ、絵のみやすさ、ジェスチャーが多く、次に、読み聞かせの前後のやり取りや、読み手の表情を40%程度の生徒が選んでいた。

この結果より、中学生は、絵や声といった視覚情報、聴覚情報に加えて、読み聞かせの前後のやり取りや、ジェスチャー、読み手の表情なども重視しており、多様なリソースを活用して内容を理解しようとしていることがわかる。

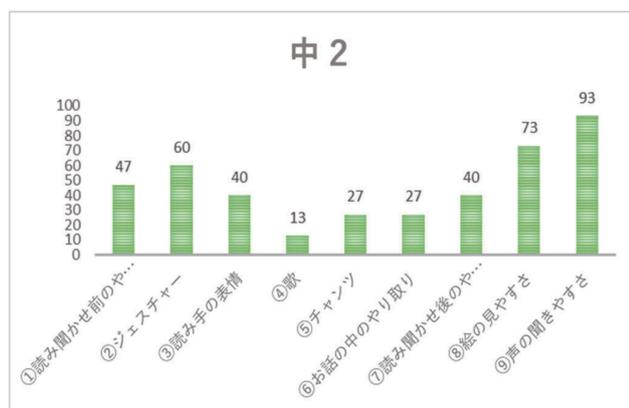


図2 B中2年生 読み聞かせで大切なもの(単位%)

3) 小学校における実証実験2

A小とB中の実践より、パワーポイントを使ってスクリーンに映すことは、絵の見やすさを向上させ、他の点でも実物と同程度の満足感が得られることがわかった。次に総社市のC小学校において、2020年4～12月に3年生、6年生に対して実証実験を行った。実験方法は、B中学校の場合と同様にパワーポイントにより映像をスクリーンに映す方法をとった。ただ、この実験はコロナの感染状況悪化により、すべての実験をすることができず、8回目の読み聞かせを中止せざるを得なかった。参考までに、C小学校の6回目までのデータを整理し、A小学校の結果と比較してみたい。

るを得なかった。参考までに、C小学校の6回目までのデータを整理し、A小学校の結果と比較してみたい。

表11 C小3年生 事後アンケート結果 N=26

3年 アンケート項目	スクリーン有り					スクリーン無し				
	1回	3	5	7	平均	2回	4	6	8	平均
①楽しかった	3.72	3.58	3.61		3.64	3.68	3.60	3.63		3.64
②わかった	3.54	3.62	3.67		3.61	3.60	3.52	3.25		3.46
③聞きやすかった	3.69	3.73	3.63		3.68	3.72	3.68	3.58		3.66
④見やすかった	3.77	3.85	3.92		3.84	3.76	3.56	3.39		3.57*
⑤これからも聞きたい	3.72	3.73	3.75		3.73	3.64	3.68	3.63		3.65

*p<.05

表12 C小6年生 事後アンケート結果 N=21

6年 アンケート項目	スクリーン有り					スクリーン無し				
	2回	4	6	8	平均	1回	3	5	7	平均
①楽しかった	3.57	3.43	3.81		3.60	3.71	3.76	3.76		3.75
②わかった	3.81	3.29	3.81		3.63	3.48	3.71	3.71		3.63
③聞きやすかった	3.71	3.57	3.76		3.68	3.82	3.80	3.80		3.81
④見やすかった	3.90	3.76	3.86		3.84	3.95	3.86	3.86		3.89
⑤これからも聞きたい	3.52	3.33	3.76		3.54	3.48	3.62	3.62		3.57

表11から、C小学校3年生では、スクリーンを使用した場合、見やすさに有意な差が見られたが、6年生では、スクリーンの有無による違いが確認できなかった。しかし、全体的傾向は、A小学校と似ており、どちらの方法でも、ほとんどの項目において3.5～3.8という高い数値が得られており、読み聞かせを楽しんでいる様子がうかがえた。

読み手の周りに集まって聞く小学校においては、スクリーンに大きく映す方法は、やや見やすくなる以外はそれほど大きなメリットとして認められなかったが、教室全体に広がった状態で聞く中学校では、見やすいという点でより大きなメリットとなっていることが示唆された。

表13は、3校の事後アンケート項目間の相関を調べるために、スピアマンの順位相関係数を算出し、実施校別に「見やすさ」と他の項目との関連をまとめたものである。

A小学校3年生では、スクリーンを使用しない場合、「見やすさ」と他の4項目との間に有意水準1%で高

い相関が見られた。

A小学校6年生においては、スクリーンの有無にかかわらず、「見やすさ」と他の項目との相関が見られ、「聞きやすさ」と「これからも聞きたい」との相関がやや高かった。

表13 「見やすさ」と他の項目との相関係数

実施校及び条件	①楽しさ	②わかりやすさ	③聞きやすさ	⑤これからも聞きたい
A小3年(スクリーン有)	.22	.23	.34 **	.12
A小3年(スクリーン無)	.89 **	.37 **	.52 **	.38 **
A小6年(スクリーン有)	.27 *	.28 **	.47 **	.35 **
A小6年(スクリーン無)	.35 **	.17	.39 **	.37 **
C小3年(スクリーン有)	.52 **	.43 **	.54 **	.58 **
C小3年(スクリーン無)	.48 **	.50 **	.49 **	.43 **
C小6年(スクリーン有)	.19	.38 **	.31 *	.17
C小6年(スクリーン無)	.37 **	.30 *	.47 **	.33 **
B中2年(スクリーン有)	.28 *	.20	.52 **	.17
B中2年(スクリーン無)	.26 *	.45 **	.42 **	.37 **
実施校及び条件	⑥読んだことがある	⑦自分で読みたい		
B中2年(スクリーン有)	.18	.17		
B中2年(スクリーン無)	.28 *	.08		

* P<0.05 ** P<0.01

C小学校3年生の結果では、どちらの条件でも、すべての項目間で高い相関が見られた。特に、スクリーンがある場合、「聞きやすさ」と「これからも聞きたい」との相関が高いことから、見やすさが確保されると、聴覚を使って楽しむことができ、今後の意欲に結びつくことがうかがえる。

C小学校6年生とB中学校2年生においては、スクリーンを使用しない場合、すべての項目と相関があった。

3つの実施校の結果より、どの条件においても「見やすさ」と最も相関がある項目は「聞きやすさ」であった。視覚情報が確保されると、聞くことに集中できるようになるのではないかと。逆に、スクリーンを使用しない場合は、「楽しさ」と「これからも聞きたい」の

項目に「見やすさ」の影響が強く出ている。拡大して見やすさが増すことで、集中力が増し、それに伴って楽しさや今後の意欲が増すと考えられる。

また、中学校においては、「見やすさ」と「自分で読みたい」の間に相関がなかった。自分で読もうとする意欲を喚起するためには、さらに別の手立てが必要とされることがうかがえる。

以上の結果より、「見やすい」ことが楽しさ、わかりやすさ、聞きやすさ、これからも聞きたいとの思いと有意に関連していることが明らかとなった。絵本の見やすさの条件をコントロールすることは、聞くことに集中して絵本を楽しむことにつながり、児童生徒の「楽しかった」、「わかった」という実感が次への意欲を引き出すと考えられる。

加えて、中学校においては、絵本の読み聞かせを楽しむことと自分で読みたいと思うことの間には、隔たりのあることが示唆された。

4) 最終アンケートの分析

A小学校とB中学校の最終アンケートにおける理由の自由記述を分析・比較をしてみると次のような結果が得られた。

表14と表16における(3)の理由の記述より、スクリーンを使用し、大きく映すことの最大のメリットは、絵が見やすくなることであり、教室のどの位置からも見やすいという点が挙げられる。高学年と中学校の生徒は、絵だけでなく文字にも注目しており、内容理解の手がかりとして活用していることがわかる。実物投影機を使用した場合は、光量が足りず、画面が暗くなってしまふというデメリットがあったが、パワーポイントを使用して行った場合は、そのデメリットを解消することができた。一方、6年生児童の回答より、実物の絵本を選ぶ理由として、スクリーンを使用すると、ページをめくる期待感が得られず絵本ならではの臨場感が薄いというデメリットが生じることもうかがえる。

これらの結果より、中学校のように移動せずに自分の座席で聞く場合やより多くの児童生徒が参加する場合は、機器を使ってスクリーンを使用することは、見やすさという点でより大きなメリットになると言える。

表14 A小3年生による理由の自由記述 N=16

(1)絵本のほうがわかりやすい理由	0人
(2)絵本のほうが好きな理由	2人
・直接見える。	1
・直接見えて見えないところが見える。	1
(3)スクリーンのほうがわかりやすい理由	10人
・見やすい。	7
・大きく見える。	3
(4)スクリーンのほうが好きな理由	7人
・見やすい。	4
・大きく見える。	3

表15 A小6年生による理由の自由記述 N=23

(1)絵本のほうがわかりやすい理由	11人
・スクリーンは、見えにくい。(光の当たり具合等で)	3
・スクリーンは、色がうすい。	3
・スクリーンは、絵が暗く見える。	1
・絵がはっきり見える。	1
・色がしっかり見える。	1
・字も書いてあり、わかりやすい。	1
・内容が頭に入りやすい。	1
(2)絵本のほうが好きな理由	8人
・スクリーンは、光の当たり具合で見にくい。	2
・色がはっきり見える。	2
・見やすい。	1
・「今どこの場面だな」と思える。	1
・生でしている感じで、本の世界に入っていける。	1
・スクリーンは、顔を上げて見ないと見えないから首がつかれる。	1
(3)スクリーンのほうがわかりやすい理由	9人
・大きくて見やすい。	6
・前に背の高い人がいても、よく見える。	1
・後ろの方でも、よく見える。	1
・絵も字も大きくなって、自分でも読める。	1
(4)スクリーンのほうが好きな理由	4人
・絵が見やすい。	2
・大きく見える。	2

中学校の最終アンケートでは、教室に設置した絵本コーナーの本を読んだかという質問に対して、40%の生徒が「はい」と答え、一人当たり、1.3冊の絵本を読んでいたことがわかった。毎回の読み聞かせに使った絵本の他のシリーズ本、同じ動物が主人公として登場する本、同様のメッセージをもつ本等を2～3冊紹介し、教室の後ろに常設した英語絵本コーナーに置くようにし、自分で好きなときに絵本を手にとり読むことができる環境を整えた。その結果、4割の生徒が自分から読むという行動とっており、絵本が英語に興味をもつきっかけとなる可能性を示している。中学校では、読み聞かせはあまり行われておらず、教員による読み聞かせの研究もほとんど見あたらない。しかし、絵本の読み聞かせは、生徒に自分でも読めそうだという実感をもたせることができ、自立読みにつながるきっかけとして有効なのではと考える。

表16 B中2年生による理由の自由記述 N=16

(1)絵本のほうがわかりやすい理由	0人
(2)絵本のほうが好きな理由	0人
(3)スクリーンのほうがわかりやすい理由	13人
・絵が大きくて見やすい	9
・文字が見やすい	1
・拡大されて細かい部分が見える	1
・後ろの席から見やすい	1
・かたむいたり、見えなくなったりしない	1
(4)スクリーンのほうが好きな理由	7人
・絵が見やすい。	3
・文字が見やすい	2
・きれいに見える	1
・かたむいたり、見えなくなったりしない	1

(2) 絵本の選書

表17, 18は、小中で読み聞かせに使用した絵本のリストである。

表17 小学校における選書

絵本番号	題名
絵本 1	Who's Shirt?
絵本 2	Pete the Cat
絵本 3	I Lost My Dad
絵本 4	Good Night Gorilla
絵本 5	Skelton Hiccup
絵本 6	Five Little Monkeys
絵本 7	When Sophy Get's Angry
絵本 8	Winnie the Which

表18 中学校における選書

絵本番号	題名
絵本 1	Who's Shirt?
絵本 2	Pete the Cat
絵本 3	Winnie the Which, The Flying Carpet
絵本 4	Skelton Hiccup
絵本 5	Good Night Gorilla
絵本 6	Guess How Much I Love You
絵本 7	When Sophy Get's Angry
絵本 8	Joseph Had a Little Overcoat

最終アンケートの結果、小中学生に選ばれた絵本の1・2位は同じであった。

表19 児童生徒の印象に残った本（A小・B中）
単位：%

順位	題名	小3	小6	中2
1位	Good Night Gorilla	66	77	67
2位	Skelton Hiccup	56	73	60
3~6位	Five Little Monkeys	50	23	
	I Lost My Dad	38	41	
	Pete the Cat	31	32	54

人気ベスト1は、“Good Night Gorilla”，ベスト2は、“Skelton Hiccup”であり、小中ともに6～7割の児童生徒が選んでいた。この2冊の共通点として、

ストーリーが単純でわかりやすく、使用されている語彙が平易なものである、同じリズムや場面の繰り返しがある、また、ユーモラスで周りとは温かい関係性をもつ登場人物が描かれていることが挙げられる。また、2冊とも英語圏で刊行された「本物の絵本」であることも、松浦・伊東（2012）の研究結果を支持するものであった。

3～6位は、学年によりばらつきが見られたが、歌やチャンツが取り入れられたものが多い傾向が見られた。

小中に共通した選書の観点については、わかりやすく、児童生徒が共感しやすい内容のものが好まれると言える。また、温かい人間関係が描かれている内容であるかも選書のポイントとなる。

また、特に小学校中学年の児童にとっては、図1の結果からもわかるように、歌やチャンツといった参加型の活動を取り入れることができるという点も重要な選書の観点と言える。

(3) 読み聞かせの留意点

児童生徒の行動観察を通して気付いた留意点については、読み聞かせの前後のやり取りの重要性が挙げられる。読み聞かせの前に、内容に関する予告を兼ねたやり取りをすることで、児童生徒の関心を高めることができた。また、内容に関連した生活体験を問うやり取りも、絵本の世界をより身近なものとして感じさせる効果があった。さらに、読み聞かせをした後、内容の振り返りにつながるやり取りをすることは、お話のメッセージをより強く印象付ける効果があった。

読み聞かせの最中では、声のトーンが大切になる。小学校中学年の児童は、読み手の表情まで目を配ることが難しいため、特に読み方に変化をつけて行う必要がある。高学年児童や中学生は、読み手の表情やジェスチャーにも目を向けることができるので、体全体で伝えるとより効果的である。その点、スクリーンを使用すると、立った状態で手を自由に使うことができ、

読み手が移動しながら多様なジェスチャーを用いて表情豊かに読み聞かせができるというメリットが生まれる。

語彙や内容が難しい場合は、思い切ってアレンジを加え、児童生徒の様子を見ながら、難易度を調整するようにした。文字を見ながら読むというより、内容をしっかり頭に入れて、聞き手の反応に応じて話しかけるように伝える手法が効果的であった。「読み聞かせ」というより、むしろ「語り聞かせ」と表現した方がふさわしいかもしれない。

読み聞かせの際、児童生徒の集中力を持続させるポイントは、ところどころに簡単な質問を差し込むことである。質問の内容は、絵について、自分の経験について、これからのストーリー展開についてなど、様々な問いかけが考えられる。質問した際、児童生徒の推測力のよさや感性の鋭さに驚かされるが多かった。聞き手から想像力豊かな反応を引き出すような質問を用意して読み聞かせに臨むことが、児童生徒の集中力や意欲を向上させることにつながると考える。読み聞かせとは、語り手と聞き手が一緒にお話の世界を創り上げる協働作業とも言えるのではないか。読み聞かせでは、読み手の感じ方が聞き手に直接伝わるため、読み手自身も楽しんで読むことが重要である。児童生徒を巻き込むような質問ややり取りの仕方を工夫することは、より効果的な読み聞かせにつながると考える。

表20 読み聞かせのポイント

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> (1) 読み聞かせ前後のやり取り (2) 読み手の表情, ジェスチャー, 声のトーン (3) 難しい語彙の言い換え (4) ストーリー展開や絵についての質問 |
|---|

6. 今後の課題

本研究により、大型スクリーンを使用して絵や文字を拡大して読み聞かせをすることは、児童生徒が聞く

ことに集中して内容を理解し、絵本を楽しむことにつながるという効果があることをある程度検証することができた。明るさを確保するため、実証実験の途中で実物投影機からパワーポイントに機器を変更した点や感染症のため実験回数が異なる点など、2小学校間における条件統制が不十分であることが課題として残るが、今後も引き続きデータ収集を続けることで、調査の信頼性を高めていきたい。

これまでの研究結果より、読み聞かせは、小中学校において英語の音や文字に興味をもたせたり、英語学習へのきっかけを作ったりすることに効果があることが確認できた。しかし、実際の授業では、教科書の内容を消化することに手一杯で、積極的に絵本を取り入れている教員は少ない。自分で読む自信がない場合は、ALT等を活用することもできる。今回は、朝学習で取り組んだが、授業の中で気軽に取り入れることで、授業の質を上げることができると考える。

今回、初めて中学校での読み聞かせを試みたが、中学校の教員から、他の学年の生徒にも読み聞かせをしたいという声が上がった。生徒の最終アンケートにも、「読み聞かせは小学生のとき以来で新鮮だった。」という感想が見られた。英語が苦手な生徒が増加する中学校において、読み聞かせは、生徒の興味関心を喚起し、学習意欲を持続させる効果を発揮するのではないか。現在も感染症の収束が見通せない中、小学校においても、十分なスペースを確保した状態で読み聞かせをするために、スクリーンなどの機器の活用は、大きなメリットとなる可能性をもっていると言える。

一方、読み聞かせから自立読みにつなげるためには、さらに具体的な取組が必要であることがわかった。英語の絵本コーナーを設置する以外にも、読むことへの興味を高めるための手立てを工夫することが求められる。

絵本の選書については、海外で刊行されているメッセージ性の高い絵本の収集を積極的に行い、小学校高学年や中学生も楽しめる選書を進めていきたい。読み

聞かせの体験は、児童生徒が「自分にも英語がわかる、楽しい。」と感ずることが出来る貴重な体験である。絵本の活用は、お話の文脈を通して、児童生徒が明確に「目的・場面・状況」を意識しながら、様々な英語表現に触れることを可能にし、児童生徒が他者と積極的にコミュニケーションをとろうとする意欲につながるのではないか。教員がもっと気軽に楽しんで取り組むことができるような様々な手立てを提案していき

いと考えている。

謝辞

本研究に多大なるご協力をいただいたA小学校、C小学校、B中学校の先生方・関係の皆様には、心より感謝申し上げます。

引用文献

- アレン玉井光江（2010）『小学校英語の教育法 理論と実践』大修館書店。
- 大川洋子（2014）「小学校英語活動における英語絵本の活用に関する研究—児童の発達段階に応じた英語絵本の活用」『鳴門教育大学小学校英語教育委センター紀要』第5号，31-40。
- ゲイル・エリス，ジーン・ブルースター（2008）『先生，英語のお話を聞かせて！—小学校英語読み聞かせガイドブック』玉川大学出版部。
- 田縁真弓（2010）「小学校英語と ICT—私立小学校での実践から—」『コンピューター&エデュケーション』vol. 29：30-35。
- 松浦友里，伊東英（2012）「小学校外国語活動における英語絵本の導入効果に関する実践研究」『岐阜大学カリキュラム開発研究』vol. 29, no.1, 94-101。
- 文部科学省（2018）『小学校外国語活動教材 Let's Try! 1, 2』東京書籍。
- 文部科学省（2018）『小学校外国語教材 We Can! 1, 2』東京書籍。
- 吉村美幸，吉田朋世，今井信義，福島安希子（2017）「小学校における英語絵本の読み聞かせの研究—担任が無理なく取り組める手法を探る」『福井県教育研究所研究紀要』122号，122-133。
- 萬谷隆一（2009）「小学校英語活動での絵本読み聞かせにおける教師の相互交渉スキルに関する事例研究」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』第60巻 第1号，69-80。

参考文献

- 師子鹿元美（2017）「小学校の外国語活動における英語絵本の活用についての調査研究」『Bulletin of Beppu University Junior College』第36号，91-99。
- 増見敦（2014）「中高一貫校での英語多読指導の科学—統計，言語分析による，英語力，言語力，自己効力感の変化を予測する科学的指導モデルの提案—」『第26回「英検」研究助成実践部門報告Ⅱ』83-99。
- 松本由美（2015）「初期英語教育における絵本の有効活動—児童の自発的反応を引き出す「読み聞かせ」の試み」『玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要』第8号，35-42。
- リーパー・すみ子（2011）『アメリカの小学校では絵本で英語を教えている 英語を話せない子どものための英語指導プログラム ガイデッド・リーディング編』径書房。